

赤峪古墳

鏡野町綜合調査ならびに鏡野町史編纂事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

鏡野町史編集委員会
岡山県苦田郡鏡野町教育委員会

あか ざこ
赤 嶽 古 墳

鏡野町綜合調査ならびに鏡野町史編纂事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

鏡野町史編集委員会
岡山県苦田郡鏡野町教育委員会



赤畠古墳 前方部埋葬施設

1960

序

1978年広域農道建設に伴う竹田縄文遺跡の発掘調査が行われ、当時としては日本最古の住居跡が発見され話題を呼んだのは、鏡野町民にとっていまだ記憶に新しい出来事です。この発見により遺跡保存の声が高まり、安藤武夫氏、中島健爾氏、定包弘吉氏などの活躍により歴史資料館建設と竹田縄文遺跡の一部保存が実現しました。

町民の埋蔵文化財に対する認識は意外に古く、1901年の光井（入澤）清三郎氏により「陶棺埋没について」と題する一文が『考古界』誌上に発表された頃に始まります。光井氏の埋蔵文化財に対する熱意は、中島幹氏、『吉備考古』同人の中島政雄氏、御船恭平氏に引き継がれ、安藤氏等による遺跡の保存運動という形で結実したのでした。

しかし、鏡野町の埋蔵文化財に対して真に考古学の清新な息吹を与えたのは新進気鋭の考古学者、近藤義郎氏でした。近藤氏は1956年に策定された「鏡野町綜合調査」の鏡野町綜合調査団歴史第1班（考古学）の責任者を担当され、1957年には天王山古墳と伊勢領大塚古墳の、翌1958年には左衛門山6号墳の現地調査を行われました。そして1960年に赤峪古墳の発掘調査を実施されました。

これら一連の調査のなかで町民に最も鮮明に記憶されているのは赤峪古墳の発掘調査です。この古墳の発掘調査は、1953年に実施された月の輪古墳の発掘調査の前例に倣い、地元青年団、婦人会の協力を仰ぎ、鏡野中学校・大野小学校の教員・生徒、町民有志が参加して行われました。この時の小・中学生の貴重な体験は今日の鏡野町における文化財保護行政を支える礎となっています。

この度、近藤氏は原稿を作成し、編集の労をも引き受けてくださいました。赤峪古墳の発掘調査報告書が鏡野町埋蔵文化財調査報告第6集として上梓されることを喜びに耐えません。近藤氏ならびに赤峪古墳の発掘調査にご尽力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月31日

岡山県苫田郡鏡野町教育委員会

教育長 佐々木茂宣

例　　言

1. 本書は鏡野町綜合調査の一環として1960（昭和35）年12月20日から1961（昭和36）年1月9日にかけて実施された赤峪古墳の発掘調査報告書である。
2. 赤峪古墳は岡山県苫田郡鏡野町土居673番地ほかに所在する。『岡山県遺跡地図』第五分冊（岡山県教育委員会1978）は本墳を赤峪1号墳としているが、正しくは赤峪古墳である。
3. 本書は1981（昭和56）年8月から開始した鏡野町史編纂事業の一環として刊行するもので、鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第6集とする。
4. 発掘調査に要した実費は鏡野町教育委員会が負担し、報告書印刷費は鏡野町史編集委員会が支出した。
5. 発掘調査は近藤義郎を班長とした鏡野町綜合調査団歴史第1班（考古学）が実施し、本書の執筆、編集、写真撮影は近藤義郎が担当した。
6. 本書に用いたレベル高は相対レベルである。また方位は磁北である。
7. 本書で用いた「赤峪古墳位置図」は建設省国土地理院発行二万五千分の一（香々美 平成2年2月1日発行3刷）を使用し立石盛詞が作成した。
8. 出土遺物および図面等は鏡野町歴史資料館（鏡野町竹田660番地）に保管している。

目 次

序

例言

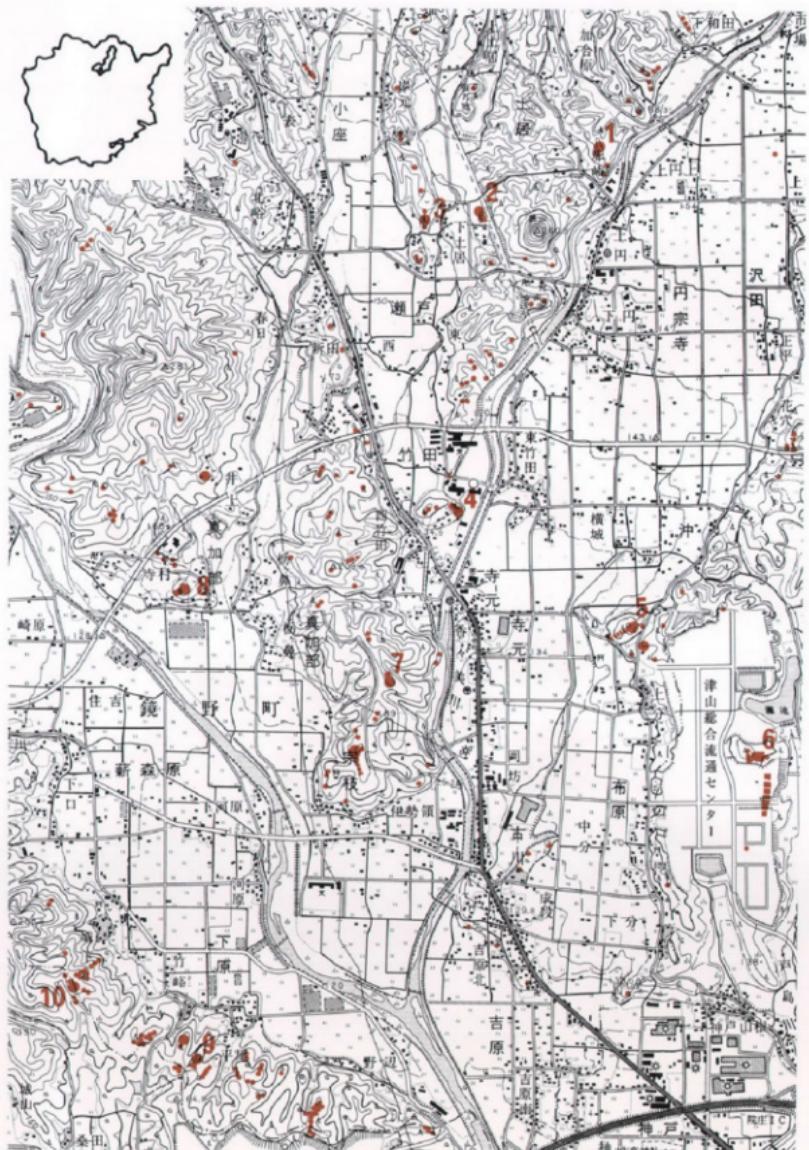
1. 立地と墳丘－登りは右隅角から－	1
2. 調査の経過と態勢	3
3. 段と葺石	5
4. 隆起斜道	6
5. 後円部の埋葬施設	7
6. 前方部の埋葬施設	7
7. 副葬品など	14
8. 築成一地山と盛土	17
9. 築造時期と被葬者の勢力範囲	18
参考文献	18
謝辞	19
付記	19
抄録	21
写真図版 1 ~ 14	

挿 図 目 次

図 1 赤畠古墳位置図	v
図 2 赤畠古墳 墳丘測量図	1
図 3 赤畠古墳 墳丘と調査区	3
図 4 A 2 トレンチ北西壁断面	5
図 5 後円部埋葬施設	6
図 6 B トレンチ南西壁断面	7
図 7 後円部埋葬施設 B トレンチの一部	7
図 8 前方部埋葬施設 平面図(一)	9
図 9 前方部埋葬施設 平面図(二)	9
図10 前方部の埋葬施設 a - b 断面(太線が断面)	10
図11 前方部の埋葬施設 b - a 断面	10
図12 前方部の埋葬施設 c - d 断面	11
図13 前方部の埋葬施設 d - c 断面	11
図14 盤龍鏡	12
図15 鉄器類(1 ~ 3)・玉類(4)・砥石(5)	14
図16 土師器壺(左)と壺	14
図17 A 1 トレンチ北西壁断面	15
図18 A 3 トレンチ北西壁断面	15

写 真 目 次

写真 1 赤畠古墳の立地 (ほほ北を見る)	
写真 2 墳丘(一) 上 望遠 下 近影	
写真 3 墳丘(二) 上 後円部 下 くびれ部	
写真 4 砥石(一) 東くびれ	
写真 5 砥石(一) 西くびれ	
写真 6 築成の状態 上 後円部 A 3 トレンチ(部分)ナメラ塊を含む土壤 下 後円部 埋葬施設(碟床)発見状態	
写真 7 後円部埋葬施設(一) 上 碟床 (右が足部方向 (右下隅に壺の一部) 下 碟床(右が頭部方向 左上は壺)	
写真 8 後円部埋葬施設(二) 後円部碟床 上 頭部方向の端部 下 足部方向の端部	
写真 9 後円部埋葬施設(三) 遺物出土状態 上 鏡(鏡の左上にあるものは人骨) 下 碟床足向外方の壺	
写真10 前方部埋葬施設(一) 表土を剥ぎ小円碟を露わす	
写真11 前方部埋葬施設(二) 小円碟をはずしたところ	
写真12 前方部埋葬施設(三) 亂堀された内部	
写真13 盤龍鏡 上 全景 下 部分	
写真14 土師器 壺	



1. 赤船古墳 2. 土居天王山古墳 3. 土居妙見山古墳 4. 竹田妙見山古墳 5. 茶臼山古墳（帆立貝式古墳）
6. 丸山2号墳（前方後方墳） 7. 古川3号墳 8. まかく9号墳 9. 鳩観音山古墳 10. 左衛門山6号墳

図1 赤船古墳位置図

1. 立地と墳丘—登りは右隅角から—

大字土居・字赤嶠の山頂の三つの尾根の交点にあたる箇所のほぼ一杯に後円部を置き、南西方向に前方部を向けて築造された前方後円墳である。付近水田からの比高約40%のこの部分の地質は通称ナメラと呼ばれる軟質の岩で、掘削・加工はきわめて容易である。墳長は約45m、後円部の径約28m、同高さ約4.5m、前方部長18~19m、同高さ約3m、後円部頂は前方部頂より約1.5m高い。美作でも小形に属するほうの前方後円墳である。

前方部前面は、下方にまで続く地形にそって斜めにつくられ、左隅角に対して右隅角が南側に張り出し、いわゆる「緩隅角」ないし「長隅角」の典型である。発掘当時は、そのことに充分注意できず、単に地形に左右された前方部形態と考えるにとどまった。たしかに地形にそった形態ではあるが、前方部を左右均整に作ろうと思えば、地山が加工容易なナメラであるから、比較的容易に造作することもできた筈である。後円部を少し北に移し、前方部右隅角に当たる部分を切り整えればよいが、そうはしていない。おそらく右隅角を張り出させ、勾配を緩くさせたのには、別な原因があったと思われる。それは埋葬の祭祀に参加する人々の参道であったからではないか。そこでこの古墳の幾つかの箇



図2 赤嶠古墳 墳丘測量図

(等高線の数字はセンチメートル)

所について勾配を測ってみた。

築造後の多少の土の流れなどを無視して勾配を測ると、右隅角で約19.5度、左隅角で（この部分の後世の掘削移動を復原すると）約27度、右活れ部で約21.5度、後円部後背で約24度である。前方後円墳の後円部や前方部側面・同前面の傾斜はきつく、隅角が緩いのが普通である（4項の注1）。そのことから、後円部頂での埋葬設備の構築作業を含め埋葬や祭祀、前方部隅角から登って前方部頂に達し、後円部へ到ってなされ、さらにその後の前方部の埋葬祭祀もまたそうであったと考えられるので、小なりといえど、赤崎古墳もまたそのような前方後円墳として築造されたとみてよい。19.5度は相当にきつい登りであるが、その他の箇所（括れ部はもっともおおく流土が堆積しているので、もとはさらに勾配急であったろう）はさらにきついし、右隅角もその下方の自然斜面はさらにきつい勾配であるので、おそらく別方向、たとえば今日の登り道から、葬列は後円部裾あたりに達し、そこから迂回して右隅角縁に至ったものと思われる。右隅角の張り出しをそのように理解したい。

墳丘の整備は全体として南東側に重点をおかれているようで、その方向に対して、より大きくより整然と作られている。つまり北西側に較べ、墳丘斜面は広く大きく、葺石も低い位置から葺かれ、前方部の側面・前面も整っている。それに対して北西側では、前方部隅角が地形に沿って鈍角につくられ、その側面の葺石の下方位置も高い。赤崎古墳に關係の深い人々の住み耕す平野からの眺望のよい南東側向けに築造された気配である。一見それは登り口としての右隅角の設置と関係するかのようであるが、両者の関係は明らかとは言いがたい。

後円部の北側と東側の尾根には、狭いが平坦な箇所がある。そのうち、北側については墳端葺石から約7mの間にトレンチを設けて祭祀の痕跡や遺物の探索をこころみたが、まったくといってよいほどそれらは認められず、表上下はやや硬質のナメラの地山であった。おそらく整地部分であったと考えられる。

2. 調査の経過と態勢

1956（昭和31）年に始まった鏡野町綜合調査の一環として、近藤義郎・渡辺健治・今井庵・岡本明郎・定久正義・村上幸雄等「鏡野町綜合調査団考古班」は、町内の遺跡遺物の悉皆調査に従事していた。当時資料がきわめて少なく貧しかった前期前方後円墳に力点を置いていた彼らはやがて、その分布調査の成果をもとに、発掘調査の候補として赤崎古墳をとりあげることになった。そのため、町当局・町教育委員会・青年団・婦人会等と協議を重ね、まもなくその同意を得た。また資金についても自炊費・交通費実費・文具費などを教育委員会が支出してくれることになった。

発掘調査は1960年12月20日に始めた。下草刈りと墳丘測量・調査区設定のち、25日から発掘にかかる。26日前方部頂に円碟多数をともなう箱式石棺の一部を発見し、27日には検土杖によって後円部に礫床らしい箇所を予想した。また墳丘のはとんどの斜面に小形の円碟からなる葺石をみた。

31日までに後円部の埋葬箇所として礫床を確認し、礫面に青銅鏡1・鉄器3・小勾玉1・ガラス小玉5のほか、遺骸の残片・朱などを発見し、前方部東側で葺石下端の連続をあきらかにした。

1961年1月に入り後円部横断トレンチと前方部頂から後円部背部にかけてのトレンチを掘り、地山と盛土の関係および埋葬施設と盛土・地山の関係をあきらかにすることにつとめた。また前方部と後

内部の埋葬施設の全貌をあらわし、細部点検のち実測を行なった。さらに葺石による墳端の追求のための発掘を実施した後、1月9日発掘を終了した。

発掘は町と町教育委員会の主催で、町民有志、町と町教育委員会職員、大野地区青年団、大野地区婦人会、鏡野中学校と大野小学校の教員と生徒、大野保育園の教員、津山高校・津山商業高校・関西高校の生徒有志のほか、発掘主力として筆者のがほか、渡辺健治・岡本明郎・村上幸雄・井上義重・西尾満雄・中力昭・鷹羽千明・永田敬三・原（十居）徹・高重詔一の皆さん、短期参加のメンバーとして今井充・河本清・神原英朗・中川満雄・小野一臣・大内田鶴子・高橋恵美子・難波俊成・茅などの皆さんのが奮闘された。

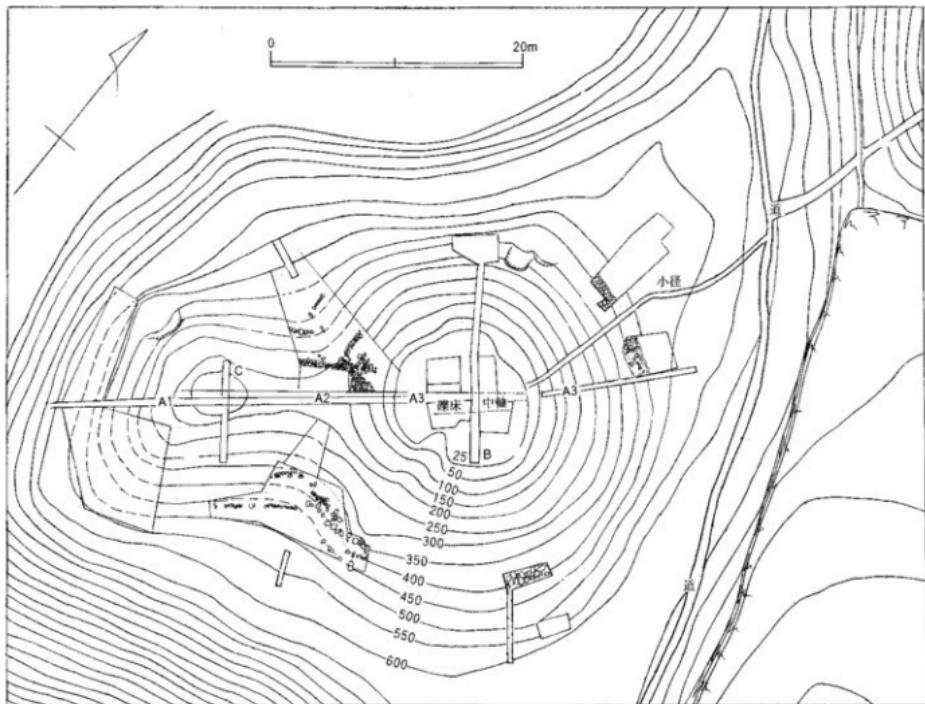


図3 赤船古墳 墳丘と調査区

3. 段と葺石

a. 段

A 1 ドレンチ・A 3 ドレンチで探索されたが、運悪くともに葺石が崩落し、盛土の一部も流れていったため、墳表において明瞭な形では示すことができなかつたが、A 3 ドレンチにおいて墳頂から約2m余りのあたりの下方に、段の「造成」・「流失」形跡とみられる部分を見いだした。これはくびれ部西側の葺石の基線の位置にはば当たる。おそらく後円部前方部とも二段築成と推定されたが、保存条件と日程の都合で精査できなかつた。

b. 蔷石

葺石の探索はくびれ部を中心に、後円部裾・くびれ部側面・前方部前面についておこなわれた。そのうち後円部裾部・前方部側面とくにくびれ部西側面および後述する隆起斜道部分において認められたが、前方部前面では急傾斜の斜面に統くためか流失がかなりひどく、ごく一部を残すのみであった。しかし葺石はもと墳丘斜面全体に葺かれていたと考えられる。石は大きなもので40~50cm²、多くは10~20cm²ほどの円礫で、原状をよく残すと思われる箇所では密接して葺かれていた。とくに墳頂などでは整然と原状を保ち、先に推定した段の箇所の葺石と合わせ、上下二斜面に葺かれたものと考えられた。葺石材は山塊東側を流れる香々美川の川原から採集したものと思われる。

4. 隆起斜道

発掘当時はもちろん、ごく最近まで「隆起斜道」という観点で前方後円墳を観察・評価することができなかつたので、やや奇異に感ぜられる向きもあるうかと思い、解説を交えながら記していくことにしたい（注1）。それは平たくいふと、前方部頂から後円部頂に達することを容易にするための道ともいふべきものであるが、大和の大形前方後円墳や備中の造山古墳・作山古墳などの大形前方後円墳では台形に整えられた大規模な「隆起斜道」をもつことが多い。大形前方後円墳の場合は、それでも足りず「隆起斜道」の途中から埋葬の墓壙底に直接に達する墓道が掘削される。それは提唱者の帝塚山大学の堅田直教授によって「掘割墓道」と呼ばれた（注2）。赤船古墳の発掘のころはそれと気付かないままに、測図を行なつた。そのため墳丘平面測量図には「隆起斜道」は表現されていない。それでは赤船古墳には、前方後円墳の属性ともいふべき「隆起斜道」が初めから作られてなかつたのであろうか。

幸いにして赤船古墳では墳丘を縦断するトレンチを掘り、その断面を図面に描いていた。「隆起斜道」という意識はないままに、そこには「隆起斜道」の存在を示す堆積層の線が見られるではないか。図4で説明しよう。地山の①灰黒色帶の上に、②長さ4mほどに亘つてはば平坦に置かれたナメラ塊を含む上層、③その上に乗る厚さ約20cm²ほどの十層と④厚さ5~10cm²の黒色土層、⑤その上の厚さ20~30cm²の土層、⑥の木炭を含む厚さ約40cm²の灰褐色土層、さらに⑦円礫と角礫を含む赤褐色土層が分厚く積まれ、最後に⑧茶褐色土層が乗る。當時気付かなかつたためまことに意外な感がしたのは、①②

を除くこれら各層がすべて向かって右、つまり後円部中心方向に等しく下降傾斜している点と、それら各層すべての上方端が「中途」で終わり、⑨腐植土層との間が線引きも土層記載もないままになっている点である。そこで各層の上方端を結んでみると、腐植土層との間に厚さ約20~25cmの層の存在を認めることができた。それは前方部との括れ部頂の付近から後円部頂に至る堆積で、これこそ岡らずも描かれていた「隆起斜道」であると考える。図面を画いた箇所には葺石はほとんど見られなかつたが、トレンチの少くとも左側には存在したので、この部分にももとあって、後に脱落したものと推定された（写真5）。正確ではないがその勾配は約14~15度前後とみてよい。

先程來隅角について説明したように、古墳壇に達した老弱男女を含む葬列は、右隅角に廻って、そこを登り、前方部頂を通って緩やかな後円部斜面（すなわちここ隆起斜道にあたる箇所）を経て後円部頂に至ったと復原できた。大形・中形前方後円墳であれば、隆起斜道の中途から墓壇底に達する墓道を掘削するのが普通であると考えられるが、本古墳ではそのような墓道の痕跡は見られなかつた。本古墳のように小形前方後円墳で、括れ部頂から後円部頂までの高さが約2mという低い場合には、「隆起斜道」がそのまま後円部頂に至り、掘割墓道は作られなかつたものと見られる。

- 注1. 近藤義郎「前方部とは何か」『古代吉備』21 1999年および「講演記録 前方部とは何か」『季刊古代史の海』16 1999年
2. 堅田「前期古墳の造り方」『古墳』光文社 1993年

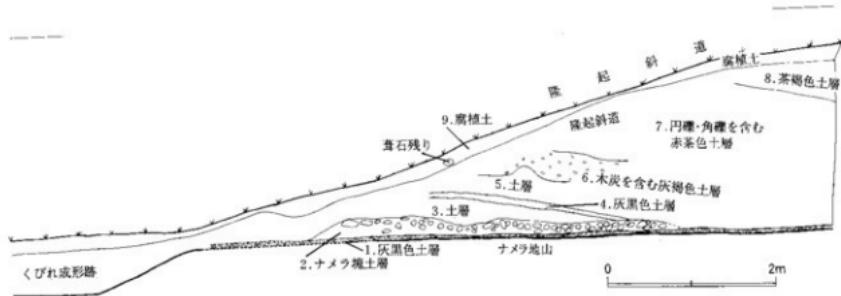


図4 A 2 トレンチ北西壁断面

5. 後円部の埋葬施設

後円部に砾床 木棺1、前方部に箱式石棺1の計2の埋葬施設が発見された。
後円部の砾床は、古墳長軸に平行し、墳頂中央よりやや南東寄りに、深さ約0.95（北東）~1.20（南西）mの箇所に見いだされ、長さ約5.40m、幅80（北東）~60（南西）cmを測る長いものである（図7）。砾は北端から大部分の範囲では小砾を3ないし4重に、南端では下方に長約20cm、厚さ約10cm前後の大型の円礫を置いた上に小砾を5、6重に敷いている。砾面は南にゆるやかに下り傾斜し、北端と南

端の高低差は約15cmである。幅と高さ、それに後述する副葬品の位置をも考慮すると、頭位は北東である。後円部中央に盗掘が試みられた跡が、径約1.60m・深さ約2.0mで認められたが(図5)、疊床木棺には当たっていない。

木棺は腐朽消失していたが、疊床面のカーヴから削竹形木棺と推定され、その径は疊床の曲面からみて、その幅をやや超えるものと考えられる。

この埋葬施設の墓域の掘り方の範囲は、部分的な所見て疊床長軸方向で約8m、短軸方向で約3mである。掘り方は斜め約60度に約1m強ほど掘り下げ、テラスのように整えたのち疊床予定部分に約20cmの余裕をもたせて掘り凹めている。その掘り凹めにナメラを含む赤褐色土を置き、その上に疊床を

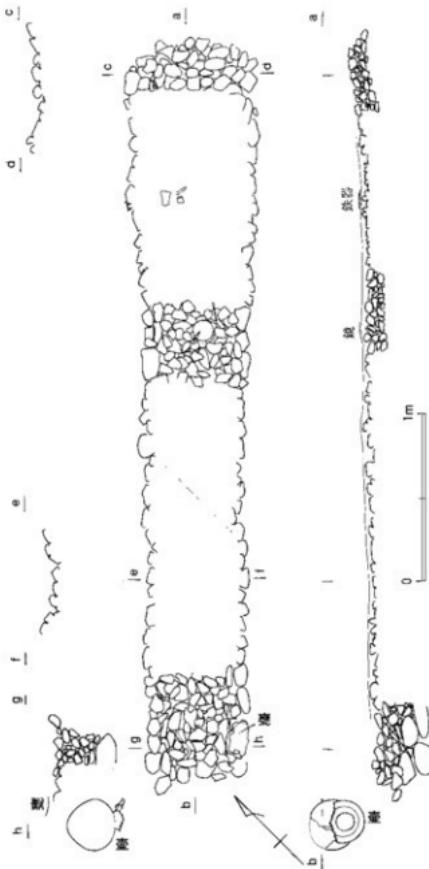


図5 後円部埋葬施設(疊床空白部分は保存のため実測を省略)

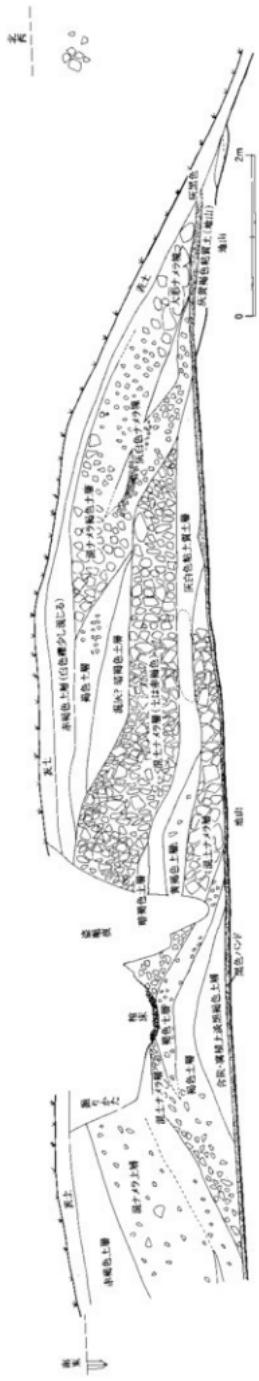


図6 Bトレンド南西壁断面

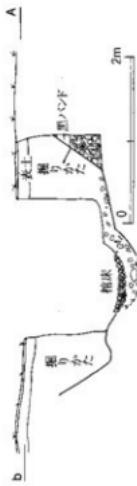


図7 後円部埋葬施設 Bトレンチの一部

つくっている。木棺を安置した後に同様なナメラを含む赤褐色土をもって埋め土としている。

疊床の南西端の西側、約20°ほど離れ二重口縁の土師器壺が、同東側の疊床に接して口縁端と底部を欠く土師器壺が潰れた状態でみられた。壺は疊床南端より数段高い位置に横転した状態で、壺は疊床面に横転し潰れた状態で発見された。前者が木棺外方に置かれたものであることは確かであるが、後者がもと棺内に置かれたか棺外に置かれたものが転倒したのかについては不明である。

この埋葬施設はこの規模の前期前方後円墳としては簡略で、堅穴式石槨も、さらには粘土槨も設けられず、疊床に木棺を安置しただけのもので、その点ではこの古墳の主あるいは後繼者の位置がそれほど高くはなかったことを示しているようである。

6. 前方部の埋葬施設

前方部の埋葬施設は、前方部頂のほぼ中央につくられた小形の堅穴式石槨ようの箱式石棺とおぼしいもので、盗掘をうけ、発掘前すでに一部の石が露わされていた。「箱式石棺」は復元が至難などにはなはだしく破壊されていた。おそらく一部は偏平な割石積み、一部は割石を立てて構築したものであろうが、いま仮に復元してみると、おそらく南西の側壁はもと割石積みで、上方の二、三段が残っているが、中程から下半にかけての割石は引き抜かれ、外側の小円碟が押し出されている状況らしい。南隅に斜めに内方にすれた割石の立て石1があるが、動かされたものとみえ、「小口」部の立て石と組みあつてもと棺の南隅を形成していたものと思われる。上方の割石も出入りがかなり不揃いなので、これも原状とは認めがたい。北東の側壁はまったく残っていない。図に外方に傾いた長約35°ほどの石がみえるが、とうてい側壁とは考えられず、一種の裏込めの石であろうか。

小口とみられ南東壁には、立てた割石1とその上に置かれた割石1（とその背後の割石1）がみられるが、小口をつくるにはなお足りない。北西の小口には根石とみられる割石1が幾つかの凹碟（丸い河原石）を背後に伴って存在したが、割石は原位置とみてよいと思われた。底には原状とみられる数枚のやや大形の平石が認められたが、一部は取り除かれた状況を示した。この平石がほぼ棺内範囲を示すと考えられる。蓋石は取り外されたとみえ、調査時まったく認められなかった。また副葬品はみられなかつたが、鏡を含めた多くの「宝物」の如きものが持ち去られたと地元の一部で伝えられている。

以上からこの棺は、偏平な割石を直立させあるいは積んで内壁を組み立て、裏込めとして15°～40°の大円碟を平面ほぼ円形に積み上げ、さらに5°大の数多くの小円碟をもって覆つたものと想定した。棺の主軸は墳丘主軸とほぼ直交し、南東一北西である。内法で長さ約1.2m、幅は推定で約50°、頭位方向は不明である。盗掘は、まず小円碟や円碟を排除し、蓋石を取り除き、さらに側壁を引き抜き、床石を剥ぎとつたものと推定される。このような特異な構造と「宝物」伝承に引きずられるように、僕達の間では「前方部」＝「宝倉」説が熱心に議論された。井の中の蛭達の最初の前方部論議であった。

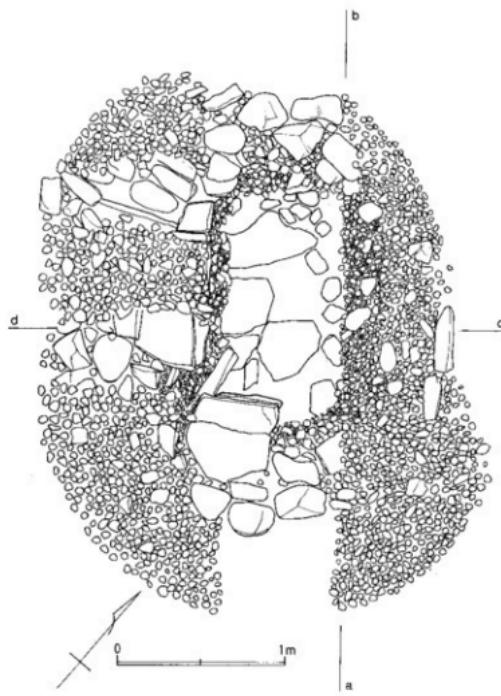


図8 前方部埋葬施設 平面図(一)

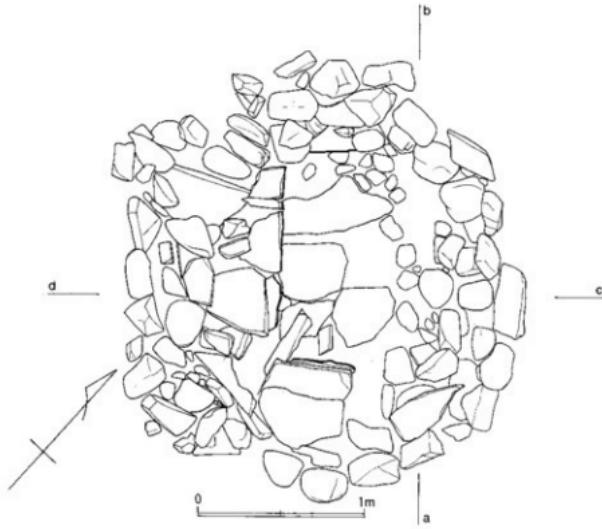


図9 前方部埋葬施設 平面図(二)

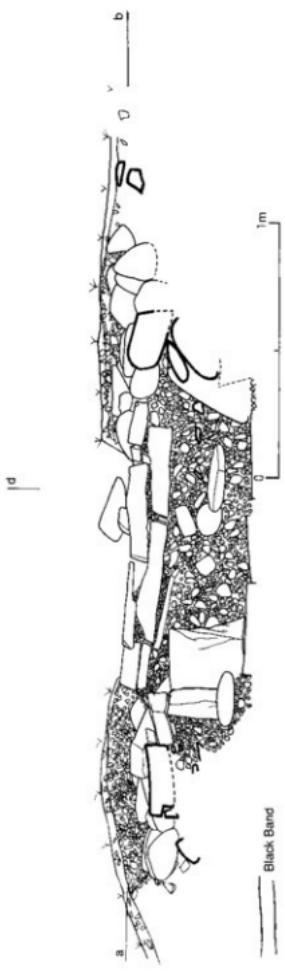


図10 前方部の埋葬施設 a - b 断面(太線が断面)



図11 前方部の埋葬施設 b - a 断面

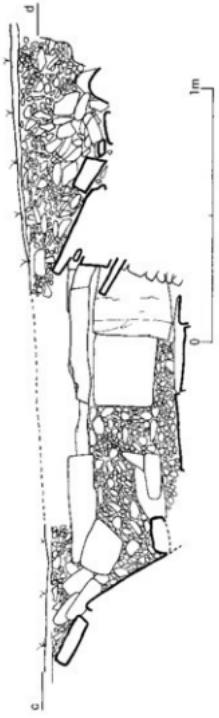


図12 前方部の地盤断面 c-d 断面

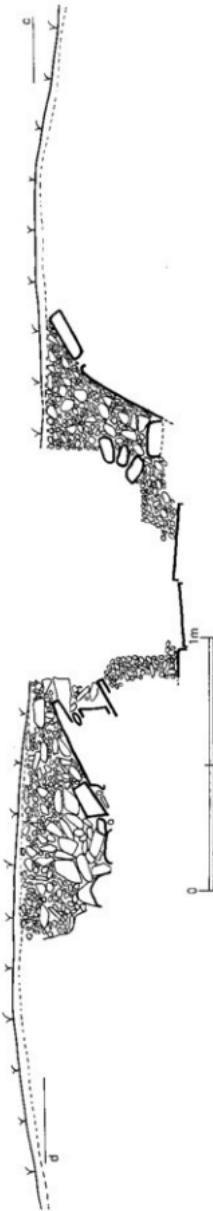


図13 前方部の地盤断面 d-c 断面

7. 副葬品など

後円部の櫛床木棺内から腐朽し計測不能な遺骸がみられたほか、鏡1・勾玉1・小玉5・蛭鏡とみられるもの1・板状鉄器1・小形手斧1の副葬品が発見された。

a. 鏡 (図14)

鏡は櫛床北東端から約1.80mの箇所のほぼ中央に鏡面を上に発見された。径約11.6cmの中国製盤龍鏡(龍虎鏡ともいう)で銘文をもつ優品である。腐朽した遺骸の一部は、あたかも鏡に保護された形でその下方で発見されたが、鏡の上方にも顎骨・頭骨の一部小片や歯片が認められた。腐朽の過程でおそらく頭蓋骨の一部が動いたものとおもわれた。鏡下方と骨の一部には朱とおぼしいもの少量がみられた。また鏡の下には勾玉と小玉がみられたが、遺骸の胸の辺りであろうか。鉄器3点は櫛床北端から約0.9~1.0mの位置のやや北西寄りに一括して置かれていた。

鏡の背面は、外から素文・鋸齒文・複線鋸齒文・鋸齒文の各帶からなる幅約1.80cmの外区と、椭圓文帯・鋸文帯・龍虎文からなる幅約2.80cmの内区からなり、鋳上り良好な青銅品であるが、土中にあつたためか青銹のほか一部が質範く青白色を呈する。発掘時に訪問された九州大学教授岡崎敬氏の教示によって銘文は次のように判読された。

青蓋作竟四夷服多賀国家人民息胡虜移滅天下復風雨時節五穀孰長保二親得天力

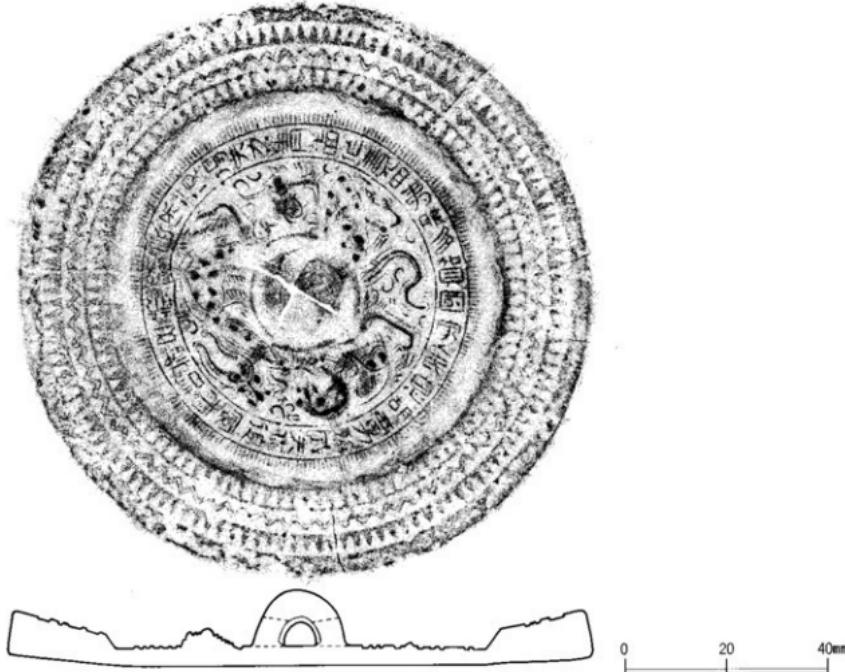


図14 整龍鏡(拓影)(実大)

b. 玉類（図15の4）

勾玉は長約1.5cm、中央の幅約4mm、厚さ約3mmの小品で、地色は乳白色を呈し、脆い。もとはガラスと思われるが、検査していない。小玉は5個ともガラス製で径4mm弱、高約3mmで青色を呈する。

c. 蛭鎌（図15の3）

蛭鎌とみられるものは長約6.5cm、幅1.5cm強で、長軸の背の厚さ約2mm弱、片側に刃が付く鉄製品である。一方の端部には曲がりが認められその箇所で折損していて、一端に木痕が両面にみられる。その部分で木柄ないし木製の把手を抱えていたと思われ、形・大きさも考慮して蛭鎌と推定した。類品で完品は岡山市沢田金蔵山古墳で出土している。他端は鋒化がひどく観察できない。

d. 板状鉄器（図15の1）

長約8.80cm、刃幅約5.50cm、元幅3.5cm弱、厚さ約4mmの鉄器で、錆などによる劣化が周縁に、錆彫れが全体のあちこちにみられる。柄の痕とみられる木質が元付近にみられるが、他の箇所にもみられるので、後者は他の木質が付着したのかもしれない。初め板状鉄斧と考えていたが、安川豈史氏の指摘によって厚さや形を見直してみると、鉄挺の半欠品と考えた方がよさそうである。

e. 小形手斧（図15の2）

長約3.7cm、錆化のため推定であるが、刃幅は約3.3cm、柄元幅約3.5cmの鉄製の小形手斧である。木柄の装着部は抱き折りの袋であるが、一方が角、片方が円となっているのは妙である。刃は片刃である。

f. 土師器（図16）

4で触れた土師器2個である。二重口縁壺は高35.2cm、口径25.8cm、頭径13cm、胴部最大径約30.9cm、頸は曲線につくりだされ、肩部にヘラ押しによる文様が約2.50cm間隔で施されている。体部には斜め方向や横方向にハケメが施され、口縁・頸の表面はよこナデ整形されている。黄褐色であるが、ところどころ赤みがかる。底中心部に近く、表面からうがった径約1.50cmの孔がある。細砂を含む良質な胎土である。壺は保存悪く口端と底部を欠く。接合不能な箇所が多いので、径や形の復元は胴部の3点を基準として図化したが、そのため復元径は約1.5cm前後の誤差をもつ。現存推定高21cm、頭推定11cm、胴推定最大径20.2cmである。肌荒れがひどいが、一部の所見では表面は胴部下方に粗いハケメ、内面には指先押圧痕がみられる。色調は黄褐色、胎土には1mm大、5mm大の細礫を含む。表面の大部分から下方内面にかけて煤痕の薄い付着がみられる。使用痕と思われる。

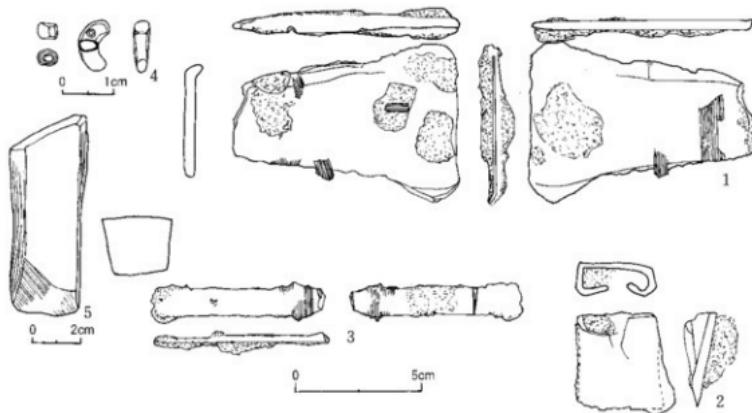


図15 鉄器類(1~3)・石類(4)・砥石(5)

g. 砥石 (図15の5)

副葬品ではないが、後円部頂東側の表土下約60~70cmの箇所から砥石1が出土した。長約8cm、断面ほぼ方形を呈する品で、黄土色できめ細かく前面に研ぎ目を残すが、細線の条痕が三面にみられる。故意にその層に置いたとするより、たまたま置き忘れたものと思われるが、断定のかぎりではない。

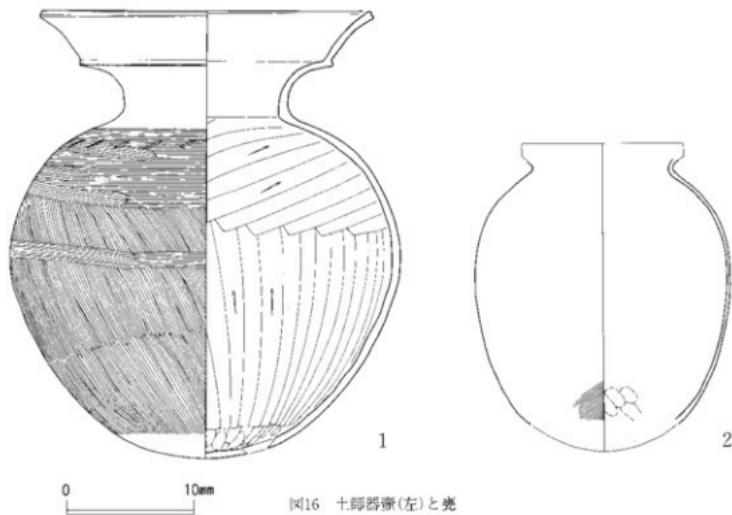


図16 土器器形(左)と甕

8. 築成—地山と盛土—

基本的には元の地山の高まりを利用・整形し、上方に盛土して築成されたものである。盛土のすべてには、混入の程度はさまざまであるが、ナメラと称する第3紀中新世のごく軟質の泥岩が含まれ、地山から採取されたことを物語っている。(図17・18)

a. 原表土=地山

後円部では現墳頂下約2.20mで、厚さおよそ4~6cmの灰黒色の原表土(いわゆる黒色帶)、続いてナメラ岩盤の地山に達するが、その範囲は径約13mほどである。原表土もナメラもほぼ平坦に拡がっているので、原地形と考えてよい(図6・18)。さらに外方に拡がっていた原地形特にナメラ層は、後円部背後などで緩く下降をみせその上にナメラ層が風化した褐色土を堆積させる箇所もあるが、多くは原表土とともに墳丘の整形のため掘削されている。掘削されたナメラ土は封土として原表土上に盛られた。



図17 A1 トレンチ北西壁断面



図18 A3 トレンチ北西壁断面

b. 盛土

盛土は大小さまざまなナメラ塊を含む（あるいは、からなる）数層の褐色ないし赤褐色土層が主体で、灰黒色土層・暗褐色土層・灰白色粘質土層・黄褐色土層などの色調をえた層が重なる。木棺床の下方には、原表土上に中心部で約40%の厚さをもつ炭や腐食を含む淡黒褐色土が集積され、その上に厚さ約25%ほどの褐色土層、統いてナメラと違う硬い石英質の小礫を含む褐色土層とナメラ塊を多量に含む褐色土層が疊床状を分け合うように積まれている（図6・7）。これはこの箇所に埋葬施設を意識した盛土と考えられるが、上記のような土層を選んだ理由は不明である。

c. 原表土と盛土

後円部から前方部へ移行する辺りから前方部頂の手前までの間は、原表土の灰黒色土層は取り除かれている。しかも後円部と前方部の間は、あたかもその境界を示すかのように約25度でナメラ層が切られている（図4）。原表土層は前方部箱式石棺の手前から現れ、石棺下部は発掘していないため厳密には不明であるが、おそらくやその下方をとおって後、前方部前面の基盤をナメラ層とともに形成している。

前方部端～前面の盛土（図17）は、もっとも厚い箇所で約1.5m、ナメラ小塊を含む褐色土層→ナメラ大塊を含む褐色土層→ナメラ小塊と小円礫を含む赤褐色土層という単純な堆積であるが、最上層の小円礫は石棺埋葬時の混入と思われる。このように前方部頂から前面にかけては、原地形への盛土で成形されている。

9. 築造時期と被葬者の勢力範囲

a. 築造時期

築造時期を考えるもっとも有力な手掛かりは、後円部の木棺床の南西端出土の土師器2個であるが、うち壺形土器は口縁と底を欠いているので、ここではほぼ完形の壺のほうをとりあげる。

この二重口縁の土器は、頸部が短く曲線をもつて口縁部と肩部に続き、そのためか口縁部下段の受け部は張り出さない。美作では対比例が少ないが、津山市日上天王山古墳や落合町川東車塚古墳出土の壺形土師器に較べやや後出とみられ、布留式前半の内に入るにしても最古式とはいえない。他の遺物の推定時期もこれと矛盾しないし、前方部が幅狭く低い形態や立地も矛盾しない。しかし埋葬施設の形態は後円部・前方部ともこの地方では類例の知られていないものである。これらを総合すると、本古墳は前方後円墳10期区分において2期に属すると考えられる。

b. 势力範囲

さきに「1. 立地と墳丘」でのべたように、本古墳の墳丘は南東の平野を意識して築造されたと考えられるから、香々美川流域の諸集団の上に立った首長の墳墓であることはまず間違いない。しかし香々美川流域では首長墳と指摘できる前方後円墳は、ほかに赤崎古墳の南の丘陵端に築かれた竹田妙

見山古墳（墳長約36m、前方後円墳）と平野部を越えた東方の尾根に築かれた沖茶臼山古墳（墳長約40m、前方短小）や丸山2号墳（墳長約40m、前方後方墳）がみられるに過ぎないので、西側を流れる山人川流域をも含めた勢力の首長墳と考えられる。とするとそこには、土居妙見山古墳（墳長約27m、前方後円墳）、土居天王山古墳（墳長約27m、帆立貝形円墳）がある。うち土居天王山古墳は横穴式石室をもつ後期古墳で、他の前方後円墳と直接つながるかどうかは不明である。

また即断はできないが、竹田妙見山古墳の南約850mの古川3号墳（墳長約30m、前方後円墳）、西方約1キロのまかべ9号墳（墳長約24m、前方後円墳）さらに吉井川本流が貫流する旧郷村の原、薪森原、下原の集団をも勢力下においていたとすれば、この地最古と考えられる郷観音山古墳（墳長43m、前方後円墳）もこれに加えることができるかもしれない。その勢力は、東方紫竹川流域を基盤とした田邑地域の勢力と、あるいはそれを包括しさらに久米川・倭文川・皿川の諸流域を基盤とした勢力と少なくとも一時的には相対峙していた政治勢力であったことはほぼ確かであろう。

参考文献

- 今井義ほか『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984年
近藤義郎「赤崎古墳」岡山県史 考古資料 1986年
安川豊史「美作」『前方後円墳集成 中国四国編』 1991年
鷹羽千明「赤崎古墳の発掘」『岡大四〇年』 1990年
鏡野町総合調査団編『鏡野町総合調査報告』鏡野町 1958年
鏡野町総合調査団編『鏡野町総合調査報告』鏡野町 1960年

謝辞

まず「2. 調査の経過」の項で挙げた諸団体・諸氏に対し厚く感謝したい。また宿舎を提供された丸天縫製株式会社および食事の世話をしてくれた地元婦人会の皆さん、発掘以来終始激励してくださいました町在住の定包弘吉・中島健爾・安藤安夫などの皆さん、磐龍鏡の銘文について懇切に教示された岡崎敬さん、序をよせて下さった鏡野町教育長佐々木茂宣さん、板状鉄器およびナメラについて意見をよせられた安川豊史さん、鏡の断面、土師器壺の実測図および赤崎古墳位置図を作成された立石盛詞さん、並びに宗森英之・土居徹の両氏をはじめ『鏡野町史』編纂委員の皆さん、本書の刊行に尽力された町当局と町教育委員会の皆さんに深く感謝する。(1998.4.9 記)

付記

九州大学文学部教授岡崎敬氏は、発掘現場で僕達を激励されただけでなく、1961年1月24日付けの書簡で赤堀古墳出土の盤龍鏡に関して次のような教示を寄せられた。岡崎さんは九州大学を定年退官後間もない1990年6月に逝去された。ここに便りの全文を掲げ学殖と人柄を偲び、その指導に深く感謝の意を表したい。

近藤義郎様

津山ではお元気な様子におめにかかれて大へんうれしく存じました。その後京都、奈良をまわってかえってきたところ、熊本大学より東洋考古学の集中講義依頼があり、明日より一週間ほど熊本にまいります。正月は旅にはじまり旅におわりそうですが、各地の真剣な調査にふれることができるるのはいい勉強になります。

青蓋作の鏡は河内国南河内郡国分村大字国分字向井、茶臼山の盤龍鏡（富岡謙蔵『古鏡の研究』図版二の5、後藤守一『漢式鏡』第十七図）に

青蓋作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下復

風雨時節五穀孰 長保二親得天力 傳告後世棄無極

となり、これが完文をなすものとおもいます。

備中國都窪郡山手村大字宿寺山古墳の盤龍鏡（後藤『漢式鏡』第一五二図）には

黄羊作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下復

風雨時節五穀孰 長保二親得天力 傳告後世棄無極

となり、両者比較的近い年代にあてられるものでしょう。富岡先生のころは晋としておられます、時代は後漢としておいてよいとおもいます。

こちらは今年はじめて卒業生がでるところでゆっくりやつていただきたいとおもいますが、折を見てでかけて下さい。「九州考古学」の件は小田君に申しておきます。

奥様にも何卒よろしくおたえ下さい。御健勝のみいのりつつ。

一月二十二日

岡崎 敬

楽浪石巖里よりの出土盤龍鏡に

青蓋作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下復

風雨時節五穀孰 長保二親得天力 楽今 (□ 欠損)

の銘のあるものがあり、また黄羊作獸形鏡に

黄羊作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下復

風雨時節五穀孰 得天力

の銘があります。梅原末治『鑑鏡の研究』一七七頁第四四図にも石巖里出土の盤龍鏡二個あり、やはり後漢としてよいと考えます。

追伸

湖南省博物館編『湖南出土銅鏡図録』一九六〇年刊をみていたら湖南省長沙出土の青蓋作盤龍鏡二面をのせています。いづれも東漢(後漢)としております。

78 青蓋作鏡（盤龍鏡） 東漢 径12.3cm 一九五三年長沙月亮山苞28出土

青蓋作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下復

風雨時節五穀孰 長保二親得天力

79 青蓋作鏡（盤龍鏡） 東漢 径13.5cm 一九五五年長沙絲茅冲3Ta苞49出土

青蓋作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜參滅天下

宜子

一月二十四日

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あかざここふん						
書名	赤畠古墳						
副書名	鏡野町綜合調査ならびに鏡野町史編纂事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第6集						
編著者名	近藤義郎						
発行機関	鏡野町史編集委員会 岡山県苦田郡鏡野町教育委員会						
所在地	〒708-0324 岡山県苦田郡鏡野町竹田660番地 TEL 0868-54-0573 FAX 0868-54-0656						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
赤畠古墳	岡山県 苦田郡 鏡野町 土居 673番地外	33606	35° 06' 14"	133° 56' 33"	1955 1220 1956 0109	312	鏡野町綜合調査に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
赤畠古墳	前方後円墳	古墳時代	木棺床1 箱式石棺1 葺石	二重口縁壺1 舶載盤龍鏡1 蛭鏡1 板状鉄斧(鉄挺か)1 手斧1 勾玉1 小玉5	布留式併行		

写 真 図 版



写真1 赤堀古墳の立地 ほほ北を見る (矢印が古墳の位置)



写真2 墳丘(→) 上 ほば西南からみる 蓼望 下 ほば南東からみる 近影(→)は古墳のおよその範囲

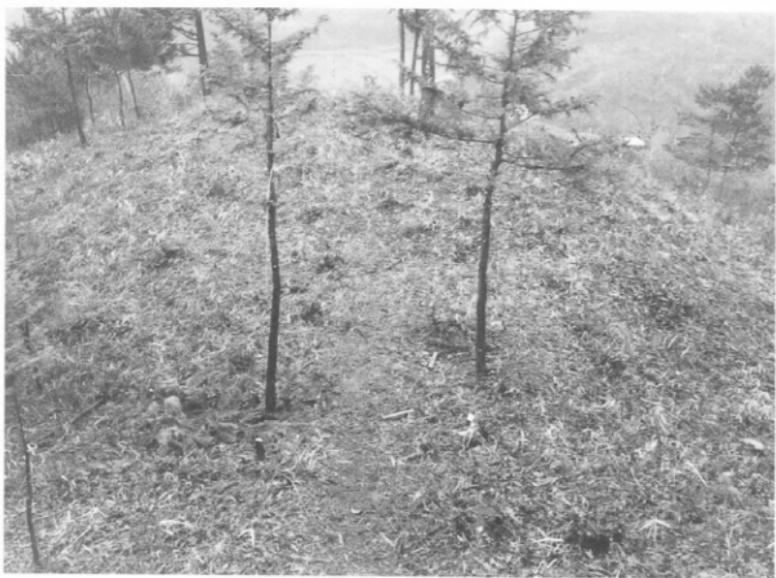


写真3 墳丘(二) 上 後円部 下 くびれ部から前方部を見る



写真4 花石（一） 東ぐびれ



写真5 莢石（二） 西ぐびれ



写真6 築成の状態 上 後円部A 3 トレンチ（部分）ナメラ魂含む土壤 下 後円部 埋葬施設（覆床）発見状態

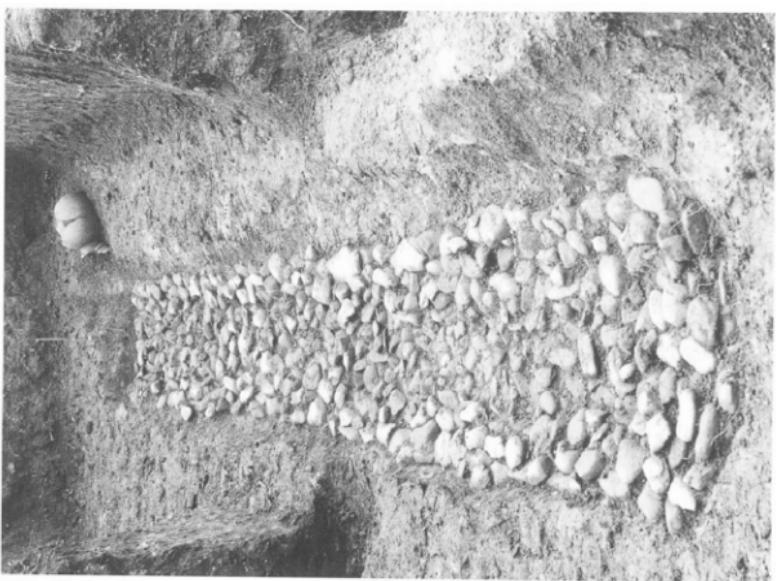
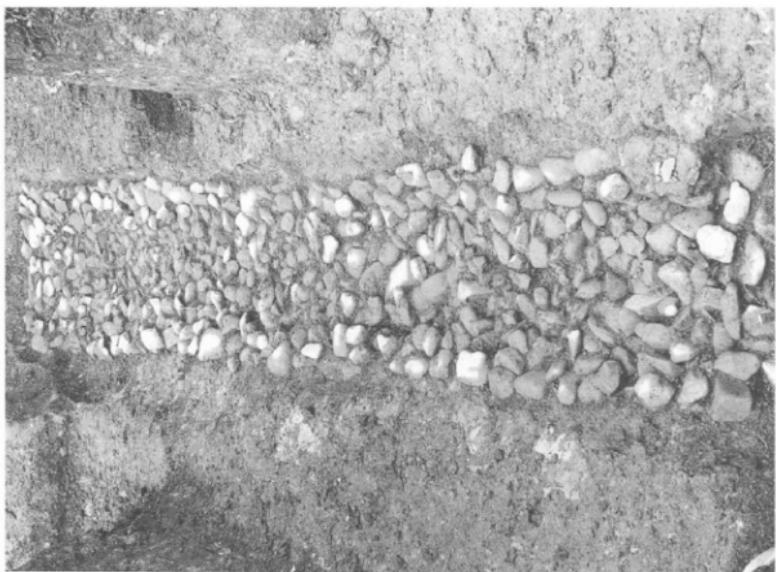


写真7 後円部 理葬施設(一) 上 罹床 (右が足部方向 足方向の下右隅近くに甕の一部) 下 罹床 (右が頭部方向 右上は甕)

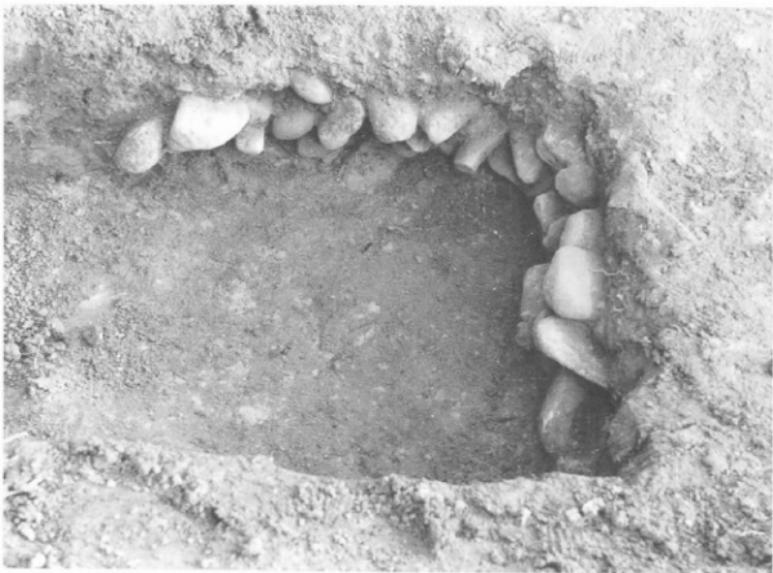


写真8 後円部埋葬施設（二） 後円部壠床 上 頭部方向の壠部 下 足部方向の壠部



写真9 後円部埋葬施設（三） 遺物出土状態 上 鏡（鏡の左上にあるものは人骨） 下 踵床方足向外方の土師器壺



写真10 前方部埋葬施設（一） 表土を剥ぎ小円窓を露わす

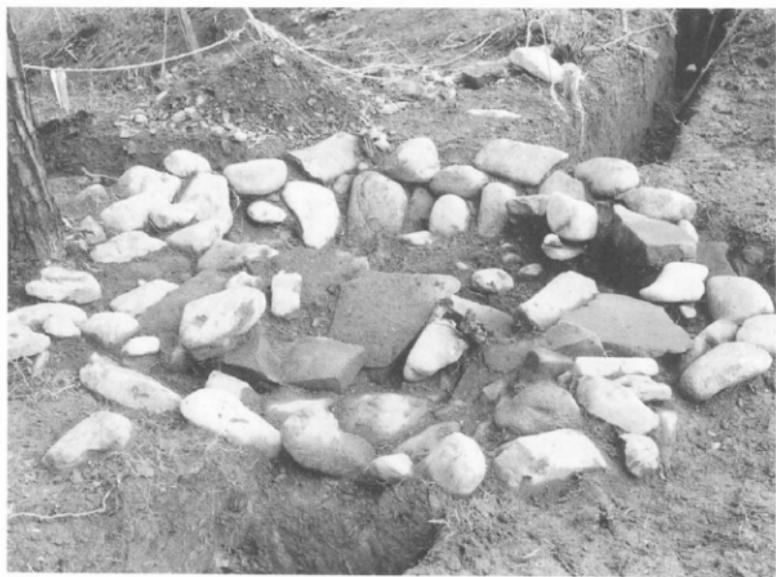


写真11 前方部埋葬施設（二） 小円礎をはずしたところ



写真12 前方部埋葬施設（三） 亂掘された内部



写真13 龍鏡 上 全景 下 部分



写真14 土師器 壺

鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第6集

赤 嶠 古 墳

鏡野町綜合調査ならびに鏡野町史編纂事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月31日発行

編著者 近藤義郎
発行 鏡野町史編纂委員会
岡山県苦田郡鏡野町教育委員会
岡山県苦田郡鏡野町竹田660番地
印刷 株式会社 きょうせい

